

ヒトコブラクダと砂漠の統治

——20世紀前半の北ケニアにおける植民地統治と資源利用——

楠 和樹

要 旨

ケニア北部地域の乾燥した環境で家畜を飼養して暮らす牧畜民、とくにソマリやレンディールなど東クシ系の集団にとって、ラクダは経済のみならず社会・政治・宗教な面で重要な生態資源である。本論では、20世紀前半にイギリスの植民地統治下にあった北ケニアで地方行政官がラクダを資源としてどのように評価・利用していたのかを検討する。それによって、この地域の統治者 - 被統治者間の植民地的関係について考察することを、目的としている。

北ケニアでは20世紀初頭から、植民地統治が展開しはじめた。この時期以降、乾燥地に適応したラクダの諸性質に依拠した在来の経済活動は、規制の対象となった。その一方で、ラクダは道路インフラ整備の不十分な北ケニアで、輸送運搬や警察隊の巡察といった目的のために活用された。また、ラクダは地方行政官による管轄地域のサファリにも使用され、彼らの集約的なアイデンティティを支える文化的資源にもなった。とはいえ、地方行政官たちはラクダの高い移動性を高く評価し利用する反面、肉量や泌乳量の豊富さといった別の性質は積極的に評価しなかった。このように、地方行政官が統治実践を遂行するためにラクダを資源として選択的に評価・利用した背景には、彼らが北ケニアの環境において生態的にも制度的にも脆弱な立場にあったことが挙げられる。この地域における統治者と被統治者は法的な観点からは非対称的な立場にありながら、同時に、この地域の環境に各々の実践を条件づけられ、各々のしかたでラクダを資源として評価・利用していたという点で、複雑な関係にあったのである。

キーワード

植民地統治、資源、牧畜民神話、ラクダ、ケニア

1. はじめに

本論は、牧畜をおもな生業とする人びとの暮らすケニアの北部地域(図1)において、植民地当局がヒトコブラクダをどのように評価・利用していたのか、また、在来の利用方法に対してどのように介入していたのか、を記述する。その作業を通して、統治者 - 被統治者間の植民地的関係について考察することが、本論の目的である。

アフリカ大陸の東部には、地殻変動によってできた大地溝帯が南北に縦断している。そしてその東側には、広大なサバンナや半砂漠草原、砂漠といった乾燥地帯が広がっている。

この地域では天水農耕による農作物の生産性が低く、収穫も不安定なため、家畜に依存する牧畜民が多く暮らしている（孫 2014）。

この地域を対象とした初期の社会人類学者たちは、これらの集団に特徴的な政治制度と、年齢体系や分節出自体系などの社会制度を描き出すことに主眼を置いてきた（e.g., Evans-Pritchard 1940; Lewis 1961; Spencer 1965）。とはいえ、彼らが政治や社会の諸側面以外に関

心を払わなかったわけではなかった。彼らの手になる民族誌的著作では、政治や社会の制度を分析する上で対象地域の環境や生業形態を理解することが必須とされており、冒頭にそれらの側面を主題とした章が設けられるのが一般的であった（孫 2012: 4）。1960年代に入ると、発展しつつあった文化生態学と生態人類学の方法がこの地域の調査に応用されるようになり、牧畜という生業活動と自然環境の関係を生態学的に解明する研究が取り組まれるようになった（孫 2012: 4-12）。

この分野の研究の蓄積とともに、土壌侵食や砂漠化など従来牧畜民の「不合理」な生態資源の利用に原因を求められてきた環境の諸問題は批判的に見直されはじめています。牧畜民による生態資源の利用方法が、不確実で激しく変動する気候によって特徴づけられる環境のもとで有効に機能することが示されたことによって、彼らに関して前提とされてきた種々の言説—「継受されてきた知識 (received wisdom)」(Leach and Mearns 1996)—が検討の対象となった。近年では、牧畜民の生業実践を「不合理」と断罪するような「知識」が、実証的な反駁を受けてもなお「継受」されていくという状況の社会的・政治的背景や不均衡な権力関係にも、分析の光が当てられている（e.g., Brockington and Homewood 1996; Swift 1996）¹。カトリーら（Catley et al. 2013）をはじめとするこれらの論者は、生態資源利用に関する牧畜民自身の知識と技術を尊重し正しく理解したうえで、この地域で実施される開発計画にそれらを反映することを主張している。

こうした方向性のもとで産出されてきた研究成果の重要性については、異論はないだろう。とはいえ同時に、しばしばこれらの研究で統治者や開発主体に関する特定の想定が前提されているという点については、留意する必要がある。つまり、牧畜民の人びとの知識

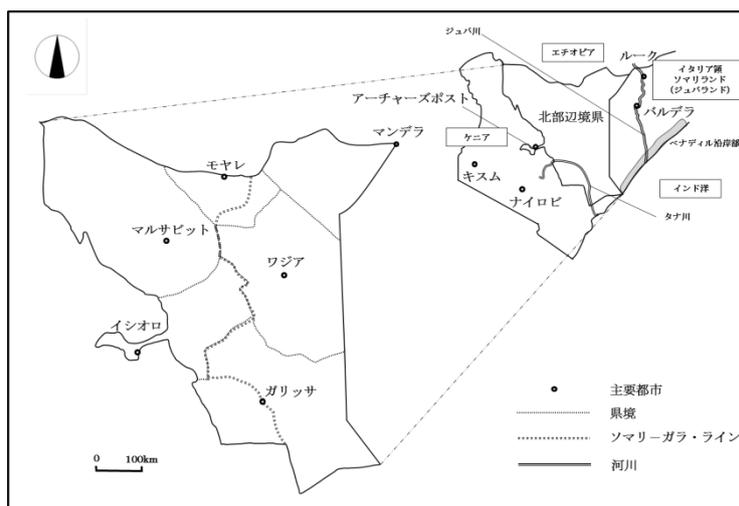


図1 植民地期の北ケニア（北部辺境県）とその周辺
 出典：Schlee (2010) をもとに、筆者作成
 注：ソマリーガラ・ラインは、1934年の修正後のものを表記している

¹ この動きと並行して、牧畜民を本質主義的に「神話化」する一牧畜民を市場経済に対して消極的で、環境条件に対して無頓着で、畜群を際限なく増殖させようとする人びととして一様に表象する一ヨーロッパ人の想像力もまた、批判的な検討の俎上に載せられはじめています（Anderson 1993; Knowles and Collett 1989; Kratz and Gordon 2002）。

と技術の有効性・柔軟性が探究される反面で、この地域の開発計画がローカルな政治的・文化的文脈を軽視しつつ西洋科学に準拠した解決策を画一的に適用してきたことが批判される時 (e.g., Scoones 1994)、統治者や開発主体に関する一面的な理解が前提となっているのだ。そしてこのような理解は、開発の名の下に実施される政策や計画が端を発する植民地期まで遡って前提とされるのが一般的である。しかしながら、植民地当局による統治と開発の実践もまた牧畜民と同様に地域のローカルな生態環境によって条件づけられていたことを考慮するならば、その実践の論理は、「(植民地支配の) 対象とされた人びとのふるまいを分析するのと同じ正確さで」(Stoler and Cooper 1997: 6) 検討されなければならない筈である²。

以上の問題意識を踏まえた上で、本論では、20世紀前半のケニア北部乾燥地域を対象として、この地域で利用可能な資源のひとつであるヒトコブラクダ (*Camelus dromedarius*) をイギリス植民地統治がどのように評価・利用していたのか、を見ていく(図2)。ソマリ (Somali) やガブラ (Gabra)、ボラナ (Borana) といった東クシ系や、トゥルカナ (Turkana) やサンブル (Samburu) などの東ナイル系の諸民族が暮らすこの地域において、ラクダは彼



図2 ラクダと牧夫 出典：筆者撮影

らが生を依存する生態資源=家畜のひとつである。北ケニアにおいてラクダは、後述するように乾燥した環境に身体的に適応しているだけでなく、いくつかの牧畜民集団にとっては文化的・宗教的にも重要である。本論では次節以降、植民地統治とラクダに焦点化した分析を展開していくが、その目的はラクダに関する理解を深めることそれ自体にはないことをあらかじめ断っておきたい。近年のアフリカ社会史研究は、イヌやロバなどの動物が人間によってどのように表象され、位置づけられてきたのかを検討することによって、そこに映し出される人種的、階級的に異なる人間集団間の関係史を取り出すのに成功してきた (e.g., Brown 2011; Gordon 2003; Jacobs 2001; Shadle 2012)³。本論はこの方法的視座に従いながら、植民地統治のもとでラクダがどのように位置づけられ、利用されていたのかを検討することを通して、この地域における統治者と被統治者のあいだの植民地的関係について考察する。

以下第2節では、北ケニアの自然環境とそれに適応したラクダの諸性質について概観する。第3節では、植民地化とともに、北ケニアの環境に適応したラクダの諸性質に依拠した交易活動と放牧活動が規制の対象となる一方で、それらの性質が在来の知識と技術とともに植民地統治に利用されていく様子を記述する。さらに第4節で、交換価値としてのラクダの位置づけの転換を検討するために、家畜の市場化体制の成立とラクダとその他の家

² 引用中の括弧は筆者による加筆。以下同様。

³ アフリカ以外の地域で同様の視座から人間-動物関係を歴史的に検討したものとして、ダーントン (2007)、伊東 (2008)、リトヴォ (2001) を参照。

畜のバーター交易活動の規制について記述したあとで、議論のまとめをおこなう。なお、本稿ではおもに、ケニア国立公文書館とイギリス国立公文書館、およびオクスフォード大学ボドリアン図書館に保管されている史料を用いている。

2. 北ケニアの自然環境とラクダ牧畜民

現在のケニア共和国に当たる地域がイギリス政府によって保護領として宣言されたのは、1895年のことである。現在でもケニアは、降雨量が豊富で平均気温も15度から20度と快適な南西部のハイランド地方と、降雨が少なく不安定で乾燥した北東部の低地地方に大別されるが(水野 2012: 25-26)、このうち保護領化とともに経済開発とヨーロッパ人による入植が集中したのは、前者のほうであった。国土の約22パーセントに当たる126,902.2平方キロメートルの面積をもつ後者の地域には、当初は植民地統治の基礎単位となる州と県すら置かれていなかったのである⁴。「無主の土地」(Archer 1963: 35)とも呼ばれたこの地域には、ジラード(P. Girouard)が保護領総督の時期にようやく行政に着手することが決定され、1909年にはその先遣隊としてアーチャー(G. Archer)がマルサビット(Marsabit)に行政府を設置するために派遣された。翌1910年3月には、この地域にも行政単位として北部辺境県(NFD; Northern Frontier District)が正式に置かれることになる⁵。名称こそ県となっているが、北部辺境県はケニアのその他の地域でもっとも上位の行政単位に当たる州に相当しており、マルサビットやワジア(Wajir)など複数の県によって構成されていた⁶。もっとも北部辺境県は、生態的のみならず行政制度的にも、ほかの地域とは異なっていた。外部県法令(Outlying District Ordinance)が適用されていた北部辺境県は、行政官以外に特別の許可を持たない者は入ることを許されなかった⁷。また、1934年に制定され

⁴ この期間に、エチオピアとの国境沿いのモヤレ(Moyale)に辺境部担当官として赴任し、国境付近の治安維持を担当していたのが、ギリシア人のザフィロ(P. Zaphiro)であった(Chenevix-Trench 1965)。

⁵ 北部辺境県が行政区分として存在したのは1910年から1925年までの期間であり、1925年には北部辺境州(Northern Frontier Province)と改称している。本論では煩瑣を避けるために、以下の記述では行政区分としての北ケニアを指すとき、時期を問わずつねに「北部辺境県」の語を使用する。

⁶ ケニアを含むアフリカのイギリス領植民地における行政の担い手は、大きくは「専門担当官(administrators)」と「地方行政官(officials)」に二分される(Prior 2013: 8)。前者は、森林保全や公共事業担当など各専門領域の職務を担当する者であり、本論ではあとに出てくる獣医担当官がこれに当たる。他方で地方行政官は、専門担当官とは区別される存在であり、ケニアの各地域の行政を担当していた。ケニアの地方行政は、ケニアの全土を州と県に区分し、さらに県のなかに地区や村といった区画を定めるとともに、ヨーロッパ人が担当する州長官(Provincial Commissioner)と県長官(District Commissioner)、およびアフリカ人が担当する首長と村長をそれぞれに設置するものであった(平田 2009: 138-139)。本論で用いられる「地方行政官」の語は、この州長官と県長官を指すものとする。

⁷ ケニアの著名な入植ヨーロッパ人であるデラメア卿(Lord Delamere)の伝記的書物を著したことで知られるハクスリー(E. Huxley)は、1937年に植物採集のために北部辺境県の地を踏んでいるが、それは、当時北ケニアで行政官として勤務していた友人のシャープ(H. Sharpe)の巡回に同行してのことだった(Huxley 1985: 148)。

た特別県(行政)法令(Special Districts (Administration) Ordinance)のもとで、北部辺境県の行政官には住民に対する強大な権限が与えられていた⁸。

このようにイギリスが植民地支配の基礎を整えつつあった時期に北ケニアに居住していたのは、東クシ系のソマリ、ガブラ、レンディーレ(Rendille)、サクイエ(Sakuye)、ボラナや、東ナイル系のサンプルなど、牧畜をおもな生業とする集団であった。このうちとくに、太陰暦とラクダの扱い方に関する諸規則を共有しており、単一の起源をもつとされる(Schlee 1989) 前四者にとって、ラクダは経済のみならず社会、政治、宗教のすべての面で重要な生態資源である。北ケニアでは16世紀頃からイギリスが植民地統治を開始する時期まで、これらの集団に対してボラナが政治的に優位に立つ、所謂「ボラナの平和(*pax borana*)」の時代が続いた。ボラナがおもにウシを飼養していたことから、レンディーレなどラクダ牧畜民は放牧地に関してボラナと競合関係に陥ることなく、彼らの政治的な支配下に取り込まれていった(Schlee 1989: 39)。しかし、19世紀末に「アフリカの角」地域からソマリが大挙して南下してきたために、この地域の権力関係は大きく変化した。イギリスが北ケニアで行政を開始した頃には、南下を続けるソマリに対してボラナは劣位に置かれていた。

ソマリやガブラ、レンディーレ、サクイエ以外の集団にとっても、ラクダはウシ、ヤギ、ヒツジとともに、乾燥した北ケニアの環境で生きていく上で重要な家畜であった。「飼料を高品質で栄養に富んだ生産物へと転換することによって、これらの(乾燥した)環境下での食糧生産を可能にする、必要不可欠なテクノロジー」(Nori et al. 2006: 17)であるラクダは、ほかの家畜が食べない有刺植物や塩生植物を採食することが可能である。また、ラクダは日中のあいだ体内の水分を保持するために体温を上昇させるなど、乾燥した厳しい環境に適応した生理学的機能を備えているために、給水せずに長距離を移動することが可能であり、ほかの家畜には利用できない水場から遠く離れた場所でも放牧することができる(Gauthier-Pilters and Dagg 1981)⁹。しかも、ほかの家畜とは異なり代謝と体内冷却のために多量の水分を必要としないラクダは、長期間に比較的多量の泌乳が可能という特徴もある(Anderson et al. 2012: 387)¹⁰。北ケニアに暮らす人びとは、このように乾燥地に適応した諸性質を備えたラクダによって、生を支えられてきた。そして、20世紀初頭に

⁸ 例えば、特別県(行政)法令第8条によって、地方行政官は政府に対して敵対的に行動する者を逮捕し、その財産を没収することができた。その他にも、秩序を乱すと判断された者などを北部辺境県外に追放する(第16条)、特定の放牧地や水場の使用を禁止する(第17条)、特別な許可を持たない限り北部辺境県内外の移動を禁止する(第18条)など、ケニアのほかの県にはない法的権限が北部辺境県の行政官には与えられていた(CPK 1935: 33-41)。

⁹ そのほかのラクダの砂漠に対する適応的な特徴として、Gauthier-Pilters and Dagg (1981: 59-77)は、排尿を少量にし糞尿を乾燥させることで体内に水分を保持する、目が強い太陽光に対して適応し、砂からも保護されている、コブに脂肪としてエネルギーを貯蔵できる、といった点を挙げている。

¹⁰ ラクダは10から15日のあいだ給水なしで生存することができる。さらにその間、一日に20リットルの乳を出すことができる。また、ラクダの乳はウシの乳と比べてタンパク質と乳糖に富み、脂肪分が少なく、ビタミンとミネラルも豊富である(Anderson et al. 2012: 387)。

この地に足を踏み入れたイギリス人行政官たちもまた、植民地統治を展開するに際してこれらの性質に着目し、利用していくことになったのである。

3. キャラバンとヨット

イギリス人の到来以前にソマリア南部のジュバ川流域地域では、上に述べたラクダの特徴を利用した広大な交易圏が形成されていた。その範囲は、現在のエチオピア南部からソマリア南部に及ぶものであり、ベナディル沿岸部の都市に住むインド系やアラブ系の商人によって、ラクダによるキャラバン交易隊がエチオピア南部のボラナ地域まで送り込まれていた。これらの交易隊は、西アフリカのサハラ砂漠を横断するキャラバン交易と比べて規模が小さく、通常はそれぞれ6頭程度のラクダを用意する商人が2、3人で隊商を組むというものだった (Dalleo 1975: 49)。この交易活動の中継点となったのが、ルーク (Lugh) やバルデラ (Bardera) などジュバ川沿いの街であり、商人たちはそこで人夫やラクダ、旅の装備を揃えた¹¹。彼らは、持参した衣服や黄銅線、煙草などの商品を家畜と取引し、さらにその家畜と交換に象牙やサイの角などを入手して、持ち帰った。そして、のちに北部辺境県となる地域は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、エチオピア南部・ジュバ川流域・ベナディル沿岸部を中心とするこの交易圏の周縁部へと組み込まれていったのである (Dalleo 1975: 44-119)。

しかしながら、前述のように20世紀初頭に北ケニアの内陸部でイギリスによる植民地統治が展開されるようになると、この交易活動は規制されていった¹²。商人は事前に許可を取得することを義務づけられただけでなく、行政府に500ルピーを預金しなければならないとされた。さらに、キャラバン隊は300ルピーの現金か、これに相当する商品の携行を求められた (Dalleo 1975: 103)。それだけでなく、北ケニアでは「新しい経済」(Dalleo 1975: 120-183)を敷設するための措置が採られていった。1920年代から1930年代にかけてモヤレやワジアなど、植民地政府によって新しく開設された行政府の周囲に小規模ながら街が発展するようになり、スワヒリ語でドゥカ (*duka*) と呼ばれる店舗がインド人やアラブ人、一部のソマリによって設営された¹³。必要な物品がベナディル沿岸部からのキャラバン交易

¹¹ この交易活動は単独の集団が独占していたものではなく、いくつかの強力なクランが支配する領域をまたぐものであった。南部ソマリア研究者の Cassanelli (1982: 156) によると、この地域のキャラバン交易ではアバーン (*abaan*) と呼ばれる者が異なる集団間の仲介役を引き受け、関税や旅の安全などについて交渉していた。他方で Dalleo (1975: 52-53) は、北部ソマリアとは異なり南部ソマリアには本当の意味でアバーンの制度は機能していなかったとしている。

¹² Dalleo (1975: 79-90) は、ラクダのキャラバン交易活動に影響を与えたほかの要因として、19世紀後半以降ソマリとボラナのあいだの関係が徐々に悪化していった点と、19世紀末からエチオピアがルークやモヤレなどの交易拠点に軍事討伐隊を差し向け、交易活動を規制しはじめた点を挙げている。

¹³ ドゥカを開いたソマリは、ヘルティ (Herti) やイサク (Isaaq) など「外来ソマリ (alien Somali)」と呼ばれた人びとだった。外来ソマリは北ケニア内の交易活動について特権的な立場にいただけでなく、「非原住民」としての地位を求めて政府に対して働きかけた (Weitzberg 2015)。

隊を待たずとも、近隣の街のドゥカで手に入るようになったことによって、従来のキャラバン取引に商人としてだけでなく通訳や道案内役など多様なかたちで参与していたソマリの牧畜民は、「生産」した家畜を売却し、得られた現金によって商品を購入、消費する存在になるよう促されていったのだ (Dalleo 1975: 121)。

規制されたのは、キャラバン取引活動だけではなく。さきに述べたように、北ケニアの牧畜民は放牧する地域の環境にあわせて、ラクダをはじめとする複数種の家畜を飼養していたのだが、植民地化によってこの放牧活動もまた制限されることになったのである¹⁴。

「それぞれの部族は、お互いに引き離しておき、みずからの所属する地域内に限定されるべきである」、という考えに基づいて「部族放牧地域 (Tribal Grazing Areas)」が設定され、放牧地の利用はそのなかに制限されていた (Sobania 1988: 229-33)¹⁵。北ケニアの牧畜民のなかでも最も勢力が強く、「アフリカの角」地域から南下を続けていたソマリに対しては、1912年にソマリーガラ・ライン (Somali-Galla line) が引かれ、その境界線より西側にソマリが入ってくるのが禁止された。また、1919年にはジュバランドやワジア、ロリアン湖沼地域、タナ川流域地域で相次いで武装解除が実施され、ソマリはイギリスに対して抵抗するための軍事的手段を奪われてしまった (Dalleo 1975: 113-114)¹⁶。こうして、ソマリを含む北ケニアのすべての牧畜民は放牧活動を制限されることになったものの、それはラクダをはじめとする家畜ごとの採食特徴と放牧の生態的なパターンを考慮しないものであったために、しばしば指定された地域外で家畜は「不法」に放牧され続けることになった。

このように植民地当局は、北ケニアの乾燥した環境に適応したラクダの諸性質に依拠した取引活動と放牧活動に制限をかけていたのだが、その一方で、統治体制を実現するためにラクダを活用することも試みていた。そもそも、道路が未整備で自動車が利用できず、代替の輸送手段の限られた北ケニアにヨーロッパ人が足を踏み入れること自体が、砂漠の海に浮かぶ「ヨット」であるラクダの助けを借りなければ実現しえないことであった¹⁷。たとえば、1896年にイギリス領ソマリランドからエチオピアを経由して陸路でケニアに到来したデラメア卿は、レンディーレの地で衣服と交換にラクダを入手して、これを輸送運搬手段とした¹⁸。輸送用にラクダを必要としたのは、先述の行政官アーチャーも同じであった。

¹⁴ もっとも北部辺境県の場合、ケニアのほかの地域とは異なり、第二次世界大戦後のワジアを例外として輪換放牧 (rotational grazing) の計画が実施されることはなかった

(Northern Province Handing Over Report, 1957: PC/NFD 2/1/4; Dalleo 1975: 261-264)。

¹⁵ Sobania (1988: 230) は、部族放牧地域の設定が生業に影響を及ぼしただけでなく、異なる集団間の関係の流動性を縮減することによって部族主義を促進したという点を指摘している。

¹⁶ イギリスによって銃火器の取引が規制されたことも、ソマリの軍事的立場の弱体化につながった (Dalleo 1975: 111-113)。

¹⁷ 1930年代にワジアで創設された王立ワジアヨットクラブ (The Royal Wajir Yacht Club) の会員が着用したロイヤルブルーのネクタイには、砂漠の船の象徴としてラクダが施されていた (Fullerton 2008/2009: 9)。この団体は、海から400キロメートルも離れた内陸地で活動した、特異なヨットクラブであった (Chenevix-Trench 1993: 137)。

¹⁸ 正確には、レンディーレの人びとは衣服とラクダの直接的な交換に難色を示したので、まず衣服を羊と交換し、その羊と交換にラクダを入手する、という迂回手順を踏むことに

北ケニアで行政が開始されたばかりの頃、マルサビットに駐在することになった英国王室付きアフリカ・ライフル銃隊 (King's African Rifles) 第二大隊の輸送手段の調達を任せられたアーチャーは、警察長官との交渉に赴いた。輸送運搬をラクダに頼らざるを得ないこの地域では、ハイランド地方で雇用していたキクユ (Kikuyu) やカンバ (Kamba) の労働者は有用ではないと考えたアーチャーだが、警察長官との交渉の末に、そのほとんどはソマリの 80 人からなる北部辺境警察隊 (Northern Frontier Constabulary) を組織する許可を与えられ、そのためのラクダをレンディールから買い付けることに成功した (Archer 1963: 35-36)。イギリス領ソマリランド保護領に転任するために 1913 年にはケニアを離れることになるアーチャーは、その短い在任期間中に、重要な輸送手段であるラクダに対する関心を失うことはなかった。1911 年に北部辺境県の司令長官に就任したアーチャーは、通常の行政業務がほとんどなかったこともあって、ラクダによる輸送の効率化に関心を向けていた、と自伝のなかで回顧的に述べている。また、中央から獣医官のニープ大尉 (Captain Neave) が北部辺境県に着任してきたときには、彼にラクダを扱った経験があったことをとくに言及している (Archer 1963: 40)。

北部辺境県では植民地化とともにラクダを輸送運搬に利用すると同時に、道路インフラの整備も着手された。「自動車を使った輸送や道路建設、電話や無線電信の導入によって、モビリティを高めると同時にコミュニケーション状況を改善するのは、総合政策の一環である」という構想のもとで、主要な行政府の置かれた街をむすぶ道路網が整備された¹⁹。しかし、予算の制約もあって、その道路とは「婉曲的な表現にすぎず、実際には、砂漠のなかを曲がりくねってすすむ、ところどころに切り立った石灰岩の露出した砂地道に過ぎなかった (Dalleo 1975: 147)。その脆弱な道路は、重量がある自動車の通行に耐えることができずしばしば修理を必要とし²⁰、とくに破損の激しくなる雨季のあいだは、使用を禁止されていた (図 3) ²¹。そのため北ケニアでは自動車の交通がすすんでからも、ラクダは牛車とともに部分的には重要な輸送運搬手段として用いられ続けたのである²²。

なった。デラメア卿はこのときレンディールから、ラクダと衣服を交換する場合、その衣服は友人や親族に分けなければならないが、羊であれば誰にも分ける必要がないという話を聞いて、彼らにとって家畜とは、衣服のような奢侈品とは異なるカテゴリーに属す富である、という理解を得ていた (Huxley 1935: 44)。

¹⁹ Handing Over Report, 1930: PC/NFD 2/1/1.

²⁰ 1948 年になっても、北部辺境県内の道路は 3 トン以上の重量の自動車には耐えられないと言われていた (Ref. No. VET. 23/5/IV/78: DC/ISO 3/20/2)。また、現在でも北ケニアの道路の多くは舗装されておらず、とくに降雨のあとは通行が極めて困難になる。

²¹ 具体的には、例年 3 月半ばから 6 月半ばと、10 月半ばから 12 月半ばまでの雨期のあいだすべての道路は閉鎖され、県長官が特別に許可した場合をのぞいて自動車の走行は禁止された (DC Wajir to PC Northern Province, April 15, 1960: DC/ISO 3/4/8)。しかし、この規定に違反する自動車の走行はあとを絶たず、これによる道路の破損を修復するのは財政的な負担となっていた。1960 年に北部州の州長官が州内の県長官全員に宛てて送った通達では、雨季のあいだに四輪駆動トラックが走るだけで 5,000 ポンド相当の損傷が生じる、とされている (Circular No. 1/60, May 2, 1960: DC/ISO 3/4/8)。

²² たとえば 1922 年の時点でモヤレまで荷物を運ぶ場合には、マルサビットまでまず牛車を用いて、そこからラクダに荷物を載せ替えていた (Northern Province Annual Report, 1922: PC/NFD 1/11/1)。

さらに、北ケニアでは道路網が整備されてからも、ラクダは単なる移動以外の目的で利用されつづけた。一例を挙げると、ラクダはケニア警察隊 (Kenya Police) と部族警察隊 (Tribal Police) が道路の通っていない牧野で不法に放牧地が利用されていないか巡察するのに用いられていた²³。また、行政官が徒歩で自分の管轄地域を巡回する際にも、ラクダは使役された。「旅行」を意味するスワヒリ語から「サファリ (safari)」と呼ばれたこの巡回において、行政官は人びとと直接コ



図3 北ケニアの道路
出典：筆者撮影

ミュニケーションをとり、問題を実地で把握することが求められていた。サファリには少人数のケニア警察隊と部族警察隊が同行し、ラクダは乗用だけではなく荷運びにも用いられた (Huxley 1985: 148)。移動は日中の暑い時間帯は避けて、おもに早朝と夕刻におこなわれた (Allen 1979: 106-107)。

北部辺境県ではケニアのほかの地域と同様に、首長を介して部族やクランを集団ごとに統治する、という間接統治の原則が遵守されていた。しかし、首長の権威が想定していたほど絶対的なものではなかったなど、早くからこの原則の適用には限界が認識されていた²⁴。そしてサファリとは、首長を介さずにそれぞれの地域の現状と問題を直接把握するための手段として、間接統治の陥穽を補完する意味で重視されていたのである²⁵。とはいえ同時に、サファリに期待された効果は、これだけではなかった。

ヨーロッパ人の想像力のなかで熱帯の環境が身体的、道徳的、人種的な危機をもたらす

²³ ケニア警察隊と部族警察隊はともに、放牧地管理と不法な領地侵入の監視、首長の職務の補助など、北ケニアの法と秩序の維持を担っていた (Isiolo Handing Over Report, 1957; Allen 1979: 103-104)。ドゥバス (*dubas*) と呼ばれた部族警察隊は、ソマリとボラナの名家の子弟から選出され、サファリの際は県長官の警護だけでなく通訳やメッセンジャーの役目も果たした (Allen 1979: 103-104; Dalleo 1975: 225-227)。

²⁴ Northern Frontier District Policy, August 23, 1945: DC/ISO 1/5/1.

²⁵ 後年ソマリランド保護領の総督を務め、若い行政官たちからは「リースおじさん」という愛称で慕われた G. リース (G. Reece) が、好例を挙げている。ある日サファリ中の G. リースは、ヤギを放牧している一人の少年と出会った。父親はどこにいるのかを尋ねると、市場に牛を2頭売りに行ったという。そこで G. リースが、「今ウシの価格は高いから、お前たちは金持ちになるな」と声をかけると、少年は「いいえ、ウシは高く売れません。一頭たったの20シリングです」と答えてきた。この言葉によって、政府が牛の買い付けを一任していた首長が、一頭ごとに60シリング支払うことになっていたのにそうしておらず、差額分を横領していたことが判明した (Allen 1979: 105)。

イギリス領の東アフリカでは、地方行政官のみならず、科学者も実験室に籠るのではなく、サファリによって現場で問題を見聞きすることが求められていた。農業行政官のスウィナートン (R. Swynnerton) は、ケンブリッジ大学とトリニダードの帝国熱帯農業カレッジ (Imperial College of Tropical Agriculture) で学んだあとの1934年に、当時イギリスの委任統治領であったタンガニーカに赴任した。その際に彼は、上官から一カ月に20日以上サファリをして過ごさなければ離任させると言われた。実際、サファリを十分おこなわなかった2、3名の職員は、職を解かれたという (Mss. Afr. s. 1426)。

と考えられていたように (アーノルド 1999: 187-221)、北部辺境県をはじめとする「砂漠地帯の周縁部」での居住は、そこで勤務するヨーロッパ人行政官の心身に深刻な影響をあたえたとされていた²⁶。北部辺境県に赴任する者は、暑さのために健康を損ねるか神経症の状態に陥りやすいとされ、平均して1年半で交代することになっていた。それだけでなく、北ケニアでの勤務はキャリアとしても周縁的とされ、懲罰的な処遇とすら見なされていた (Allen 1979: 98)²⁷。ハイランド地方とは異なり、周囲に行政官以外のヨーロッパ人がまったく住んでおらず、交友の愉しみを持たない環境は彼らに孤独感をもたらし、ときに心身の不調を訴える者もいた²⁸。女性と子どもはとくにその環境への感受性が強いとされたために、北ケニアの行政官は結婚しないよう求められており、配偶者がいたとしても単身赴任しなければならず (Huxley 1985: 164)、そのために孤独感は一層深められた²⁹。そして、このような環境に身を置いていた彼らの心理に開放感をもたらすことのできた数少ない活動のひとつが、サファリであった³⁰。マンデラ (Mandera) で勤務していたモンゴメリー (B.

²⁶ Allen (1979: 35) は、厳しい勤務環境の「砂漠地帯の周縁部」の例として、北部辺境県のほかに、ナイジェリア北部とウガンダ北部、ソマリランド保護領、スーダンを挙げている。

²⁷ ヴィクトリア湖岸のキスム (Kisumu) よりも北部辺境県での勤務を選んだターンプルに対して、あるインド人の下級職員は、「かわいそうな若者よ。君は自分のキャリアを台無しにしてしまった」と言って悲しんだという (Mss. Afr. s. 2108)。

²⁸ G. リースがトゥルカナ湖の南に位置するコロシア (Kolosia) に駐在したのは、1927年のことだった。神経症に陥っていたその前任者は、官舎内で就寝すれば屋根の下敷きになることを危惧し、屋外で寝れば頭部をハイエナに食べられてしまうと考えた結果、ベッドを半分が屋内に、あとの半分が屋外になるように置いて寝ていたという。その他の前任の行政官のなかにも、神経症に罹ってハイランド地方に送還された者や自殺した者、黒死病の犠牲者となった者がいた (Allen 1979: 98)。1935年にターンプル (R. Turnbull) が初めて北部辺境県に赴任したときも、その前任者は神経症に罹ってすでに離任していた (Mss. Afr. s. 2108)。

²⁹ G. リースと結婚しケニアにやってきた A. リース (A. Reece) は、G. リースの上官に当たるグレンディ (V. Glenday) と初めて面会するまで、滞在を拒まれるのではないかと戦々恐々としていた。しかし、実際に対面したグレンディは「乳のように穏やか」で、彼女を拒まなかった (Huxley 1985: 164)。

また、1948年に社会人類学者のガリバー (P. Gulliver) が植民地社会科学研究評議会 (The Colonial Social Science Research Council) からの助成を受けてトゥルカナで調査をおこなった際には、ケニア政府は彼が妻を同行することについて当初反対していた。「(トゥルカナの環境は) その人の性格と個性、身体的、心理的な状態にまで影響する」というのがその理由であった。ガリバーは、彼女が「厳しい環境に慣れており、他の人類学者の妻たちがそうしてきたように、テント生活もこなせる」し、「家屋での生活を期待していない」として植民地科学評議会とケニア政府を説得し、最終的には同行を認められた。結果的に彼女はこのフィールドワークにおいて、とくにトゥルカナ語の言語学的調査と女性への聞き取り調査の面で貢献することになった (A. Richards to P.A. Wilson, March 17, 1948: CO 927/64/1; D. O'Hagan to P.A. Wilson, April 29, 1948: CO 927/64/1; A. Richards to P. Canham, January 13, 1949: CO 927/64/1; Gulliver 1955: vii)。

³⁰ 「頭脳と体力のあいだでバランスをとるのを好む大学生」 (Allen 1979: 35) にとって、植民地行政官職は魅力的な職業であり、アフリカの植民地に勤務する行政官たちはサファリ以外にも、スポーツ全般を好む傾向があった。Kirk-Greene (1989: 226) によると、1900年から1965年までにアフリカの植民地で総督を務めた人物のうち、半数以上がスポーツ活動を趣味としており、その上位にはゴルフ、釣り、狩猟、テニス、クリケット、乗馬が挙

Montgomery)の表現を借りると、サファリの期間中は「どの瞬間も喜ばしかった」(Allen 1979: 106)。スワヒリ語と現地語しか解さない人びとしか住んでいない環境での半年間の勤務中に深刻な神経症的状态に陥り、日々の些細なものごとに過敏に意識を向けるようになっていたモンゴメリーだが、数々の北ケニア行政官を惹きつけた「自由の感覚と、この地域の広大さ」(Maciel 1985: xviii)を存分に味わうことのできるサファリのあいだだけは、開放感に浸ることができたのである。そのために、在勤中に行政府の屋内での仕事に徹するのではなく、頻繁にサファリに出ることは、北ケニア行政官にふさわしい条件のひとつとして位置づけられていた。そして、警護のケニア警察隊とともにサファリに不可欠な存在であったラクダの隊列は、北ケニア行政官にふさわしい条件や性質をすべて備えた理念型として概念化された「北ケニアの偉人たち」(Huxley 1985: 177)のイメージを、背後から支えていたのである³¹。

以上のように輸送運搬に使役されていたラクダは、植民地統治の最初期にはデラメア卿やアーチャーがそうしたように、別の物品との交換によって取得されていた。しかし、北ケニアで行政体制の整備がすすむと、ラクダはほかの家畜とともにそれぞれの牧畜集団から貢納として徴収されるようになった³²。唯一貢納の支払いを求められていなかったソマリには、一定額の支払いのかわりに、サブ克蘭ごとに一定数の輸送用のラクダを供出することが求められていた。1920年代にはソマリからも貢納の徴収が開始されたものの、一部のソマリが抵抗の姿勢を示したために失敗に終わり³³、1931年からは代わりに人頭税の徴収が開始された³⁴。これ以降ラクダは、ソマリをはじめとする牧畜民から賃借されることに

げられた。他方で行政官たちは、スポーツのほかにも、小説を著したり勤務地で歴史学、言語学、民族誌的な調査をしたりして余暇を過ごしていた。彼らは *Tanganyika Notes and Records* や *The Uganda Journal*, *The Nigerian Field*, *Africa*, *Journal of the Royal African Society* といった学術雑誌に頻繁に寄稿していた (Kirk-Greene 2000: 173-175; Prior 2013: 40)。

³¹ 北ケニアにふさわしい人物とは、妻を娶らないだけでなく女性の魅力に対して興味をまったく示さず、ソマリの特定の集団に肩入れすることはなく、行政ステーションにいるときには一日に14時間勤務し、一カ月のうち半分は徒歩でのサファリに出かける者を意味していた。さらに彼は孤独に耐え、北ケニアへの赴任を懲罰ではなく特権的な措置として受け入れなければならなかった (Chenevix-Trench 1993: 136-137)。また、北ケニアでの経験を共有し語る者たちの特権的な意識を表す概念としては、「北ケニアの偉人たち」のほかにも、「ライオンの乳母」(Huxley 1985: 154)や「北部辺境県係 (wallah)」(Chenevix-Trench 1993: 136-137)、「髪に砂の絡まった男たち」(Kirk-Greene 2006: 71)がある。

³² たとえば1914年からは、サンプルとレンディーレは家畜の1.5パーセントを納めることになっていた。それは、ヤギとヒツジ1,100頭とラクダ120頭に相当した (Dalleo 1975: 206)。

³³ 貢納の徴収に際してワジアのソマリから、数あるソマリの集団のなかで彼らのみが貢納の対象となっている点について不満の声が上がった。行政側は、強制的に徴収を開始したものの、ソマリのうちハバル・スリマン (Habr Suliman) の集団が抵抗し、4人の死者が出た。行政側はこの行動に対して、懲罰としてさらにラクダ100頭を科した (Wajir Handing Over Report, 1924: PC/NFD 7/4)。

³⁴ ケニアのほかの地域では1901年からは小屋税が、1910年からは人頭税が徴収されていたが、北部辺境県の住民はそれらの支払いを求められていなかった。最終的にソマリからの貢納の徴収が失敗したことが契機となって、北部辺境県での徴税が検討されることになった (Dalleo 1975: 208)。

なった³⁵。また、通常その際にはラクダ 5 頭当たり一人の目安で、ラクダの世話をする牧夫も雇用された。

このように植民地当局は、乾燥地域に適応したラクダの諸性質だけでなく、その扱いに親しんだ人びとの在来の知識と技術までも取り込み活用していた。さきに言及したアーチャーを含め、北部辺境県の初期の行政官たちはラクダの有用性を認めていながらも、その扱いに習熟していなかった。たとえば、1910 年 7 月にレンディーレから貢納として徴収され、マルサビットで輸送運搬用に使役されていた 201 頭のラクダの多くは、鞍の不具合のために背を痛め、さらに酷使の結果死んでしまった。この損失を補うために新たに 217 頭のラクダが購入され、399 頭が賃借された。しかし、経験のある獣医官が不在の状況は変わらず、病気になったラクダの手当ではマルサビット県長官自身が県の職員とともに、毎朝 3 時間半かけておこなわなければならなかった。標高が高くて冷涼な気候のマルサビットはラクダを飼養するのに適していないという結論に至ったものの、さらに 69 頭が病気のために失われることになった³⁶。

しかし、北ケニアに植民地統治が展開し、ラクダとラクダの扱いに習熟した人びとの在来の知識と技術を取り込んでいくにつれて、植民地当局側でもラクダに対する実践的できめ細かい眼差しと知識が体得されていった。「ラクープ (*rakhoub*) 」と呼ばれた、ケニア警察が乗用に使役するラクダの訓練に関する覚書は、このことをよく伝えている³⁷。そこでは、ラクープの食餌について一日に 6 ポンドの豆類飼料と 4 オンスの塩で十分であるが、雨季には食べ過ぎて太ってしまわないよう注意する必要がある、と記されている。また給水については、ラクープは 4 日間なら給水なしで移動することができるが、その場合 2 日目からスピードとスタミナが落ちる点を指摘している。また、ラクープの訓練開始時期については、コブが十分に発達し、どんな種類の有刺木でも採食できるようになる 5 歳から 6 歳頃がよいとしている。これらの指摘に表れている、ラクダの体調と性質に関するきめ細かい配慮は、ラクダの扱いに明らかに困惑していた先

表 1 ソマリ語のラクダに関連する語彙のリスト

ソマリ語	英語
<i>ado</i>	mange
<i>sikio</i>	elbow brushing
<i>dukkan</i>	trypanosomiasis
<i>kud (garat)</i>	glandular fever
<i>dugato</i>	a chesty cough
<i>aur</i>	baggage
<i>gelup</i>	a prime camel
<i>duffan</i>	castrated camel
<i>kod</i>	uncastrated male
<i>hal, gazin</i>	female camel
<i>khalig</i>	young uncastrated male

出典：PC/NFD 5/5/9

³⁵ 度々の統一の試みにもかかわらず、ラクダの賃借料は県ごとに異なっていた。たとえば 1939 年の時点でイシオロでは、道路仕事に使役する場合一カ月に 15 シリング、サファリの場合一日に 75 セントとして一カ月に 15 シリングまでが支払われた。また、使役中にラクダが死亡した場合の補償額は 40 シリングと定められていた (Ref. Your T&T. 28/3/2/1158 of 22. 12.39., December 28, 1939: DC/ISO 3/20/2)。

³⁶ Masabit Annual Report, 1910-1911: PC/NFD 4/1/3.

³⁷ PC/NFD 5/5/10.

述のマルサビット県長官にはなかったものである。加えてこの資料には、ラクダに関して頻用される語彙のリストが含まれているが、そのすべての語には対応するソマリ語の単語が付されている(表1)。これらの語彙は北ケニアの植民地当局の知識体系のなかに取り込まれていくことによって、彼らがラクダの疾病に対処したり生育段階を把握したりする際の、概念的な手がかりを提供していったと考えられる。

4. 肉と市場

前節で述べたように、道路整備の不十分な北ケニアでラクダは使用価値として、すなわち輸送運搬手段やラクブとして意義を見いだされ、利用されていたのだが、その一方で、交換価値としての位置づけは紆余曲折を経ることになった。植民地初期には、北ケニアのソマリは、ガリッサ(Garissa)や、レンディーレやサンプルの地域にラクダを連れて行ってヤギとヒツジに交換していた。交換によって得た家畜をイシオロ(Isiolo)やリフトバレー州の家畜市場で売却するのが、彼らが現金を手にするための手段であった(Dalleo 1975: 177)³⁸。「新しい経済」体制のもとで牧畜民がドゥカで日用品を買い求め、人頭税を支払うことができるようになるには、彼らの手に現金が行き渡る必要があった。そして、換金作物生産などの現金稼得につながる手段が非常に限られていたこともあって、北部辺境県の地方行政官もそのような家畜のバーター取引を推奨していたのである³⁹。

しかし、このバーター取引活動は、北ケニアで家畜の市場化が進展するにつれて規制されていくことになった。1930年代にアフリカの資源に関する統治者側の想像力に根本的な変化が生じた結果、希少な資源をいかに管理・保護し、資源に比して過剰なポピュレーションをいかに抑制するかが問題として前景化したことによって(Anderson 1984; Hodge 2007: 144-178)、牧畜民の居住地域を管轄する行政官たちは、限られた放牧地の収容力(carrying capacity)の範囲内で家畜群をどのようにして維持し、その余剰分の家畜をどのように処分するか、という問題に直面した(楠 2014)。従来、北ケニアからの家畜輸出には、ハイランド地方でヨーロッパ人入植者が経営する畜産業を保護する目的で厳しい制限がかけられていたのだが、この問題を解決するために、一転して家畜、とくにウシ、ヤギ、ヒツジの市場化が促進されることになった。第二次世界大戦後の1950年に設立されたケニア食肉委員会(KMC; Kenya Meat Commission)は、この構想の軸に位置づけられた機関であり、ケニア国内で屠畜場や食肉の冷蔵、加工施設を運営する、唯一の排他的な権限を与えられていた。さらに1952年には、ケニア食肉委員会に対して家畜を調達するために畜産サービス局(Department of Veterinary Services)の一部局として、アフリカ家畜市場化機構(ALMO; African Livestock Marketing Organization)が組織された(Aldington and Wilson 1968: 2-3)。アフリカ家畜市場化機構は、家畜をアフリカ人の居住地域から安定的に供給することによって、「土地の収容力に見合うように過放牧地域から(家畜を)削

³⁸ Sperling (1987: 6)によると、サンプルにラクダが最初に導入されたのは、1920年代初頭のことである。もっとも、1950年代中頃までサンプルは、ラクダを積極的に飼養することはなかった。

³⁹ Northern Province Handing Over Report, 1934: PC/NFD 2/1/1; CPK, NAD, 1931: 21.

減すること、過放牧状態ではない地域からは自然増殖分を取り除くこと」を目的としていた⁴⁰。つまり、この組織がすすめた家畜の市場化は経済政策であると同時に、生態学的な政策でもあったのだ。アフリカ家畜市場化機構はこの目的のために、家畜が衛生的に問題なく通行できる道路網と検疫所 (holding ground) を設置して家畜の供給を促進するとともに、1951年にはイシオロから約35キロメートル北方に位置するアーチャーズポスト (Archer's Post) に、簡易式の屠畜場を設置した。この屠畜場は、「生産性が低い割に放牧地資源を浪費してしまう屑家畜を、牧畜民が手放すよう促すことによって、牧畜民の家畜群の構成を改善することを意図していた」(Raikes 1981: 119)。「屑家畜 (scrub stock)」と呼ばれた、ケニア食肉委員会の経営する食肉工場が引き取るには質の劣る、あるいは不適切な家畜はここに持ちこまれ、屠畜後は切り干し肉や燻製肉、獣脂、家畜の餌などに加工された⁴¹。

ほかの家畜と比較してどれだけ肉量と泌乳量が豊富であっても、あるいは輸送運搬手段やケニア警察のラクダとしてどれだけ有用であったとしても、市場化の文脈ではラクダは「屑家畜」の一種にほかならなかった。ケニア食肉委員会が買い求めたのはウシ、ヤギ、ヒツジのみであり、北ケニア以外では消費されないラクダは、「食料として必要な分だけ、とくに早魃でウシが死んだときに必要なだけ」飼養すればよいとされていた⁴²。そのため、北ケニアでウシとヤギ、ヒツジの感染症が警戒され、不十分ながら対処されるようになって、ラクダだけは積極的な家畜衛生政策の対象になることはなかった⁴³。アフリカ家畜市場化機構はほかの家畜と同様ラクダを買い付けていたが、それは専らアーチャーズポストで処理するためであった。

しかし、アフリカ家畜市場化機構がラクダに対して提供した価格は、必ずしも牧畜民が満足できるものではなかった。そして植民地当局側は、たとえ価格が十分高くなかったとしても、「税を支払っていない者は、ラクダを売るほかに選択肢のある立場にはおかれていない」と考えていた⁴⁴。そのため、北ケニアの牧畜民のあいだではラクダとそれ以外の家畜のバーター取引が引きつづきおこなわれていたが、それは市場化政策の観点からは望ましいことではなかった⁴⁵。ある地域から別の地域にラクダが連れて行かれ、ほかの種類の家畜と交換されるということは、後者の地域にとっては市場価値のない「屑家畜」が増えることを意味していた。また、アフリカ家畜市場化機構が提供する価格こそが標準であると

⁴⁰ Ministry Directive on ALMO: PC/NGO 1/7/24.

⁴¹ Draft, Reduction of Livestock in African Areas: Field Abattoir: BV 12/323.

⁴² Northern Frontier District Policy, August 23, 1945: DC/ISO 1/5/1.

⁴³ ラクダのトリパノソーマ症であるドゥカン (*dukan*) に対して、1951年にワジアの県長官は、予防接種をするという政策を変更することを上官に当たる州長官に提案している。「辺境部におけるラクダの頭数が急激に増加するのをなんとかしてでも喰いとめなければなりません。また、一度予防接種を始めてしまったら、あとになって止めようとしても政治的な影響が出るでしょう」、というのが、その理由であった (Northern Province Handing Over Report, 1951: PC/NFD 2/1/4)。

⁴⁴ Provincial Livestock Marketing Committee, July 18, 1959: AGR 1/55.

⁴⁵ とくに問題とされたのが、ワジアからほかの県へのラクダの流入であった (Record of the Sixth Meeting of the Northern Province Livestock Marketing Committee, August 27, 1960: AGR 1/55)。

いう考えから、バーター取引におけるラクダの価値は、不当に高く吊り上げられていると見なされていた⁴⁶。これを受けて、従来許容され、推奨さえされていたラクダのバーター取引は、原則として規制されることになったのである⁴⁷。

5. おわりに

本論では、北ケニアにおいて植民地体制のもとでラクダがどのように評価・利用されていたのかを検討してきた。北ケニアでは植民地統治の展開とともに、乾燥地に適応したラクダの諸性質に依拠した在来のキャラバン取引は規制の対象となった。また、「部族放牧地域」がそれぞれの民族集団に割り振られたことによって、ラクダをはじめとする家畜の放牧活動も制限された。他方でこれらのラクダの性質は、道路インフラ整備の不十分な北部辺境県で、輸送運搬や警察隊による巡察といった目的のために活用された。これに加えて、ラクダは行政官による管轄地域のサファリにも随行することによって、彼らの集合的なアイデンティティを支える文化的な資源にもなった。しかし、ラクダの高い移動性が高く評価され利用された一方で、肉量や泌乳量の豊富さといった性質は、一時はバーター取引によって活用されたものの、第二次世界大戦後の家畜の市場化体制のもとで積極的に動員されることはなかった。ケニアでラクダとその乳を商品とする市場取引が活性化するには、国内の地方都市や中東諸国からの需要が増加する 2000 年頃まで待たねばならなかった (Anderson et al. 2012; Mahmoud 2013)。このように、北ケニアにおけるラクダの評価と利用は、植民地統治に伏在する種々の目的に応じた多面的なものであった、といえるだろう。

居住人口の大半を牧畜民が占める北ケニアの乾燥地域は、植民地期以降現在にいたるまで政治的にも経済的にも周縁的な地位にある。しかしそれは、この地域に国家が不在であったことを意味するものではない。北ケニアの周縁性は、この地域に法的に特殊な位置づけを与える国家体制のもとで歴史的に構成されてきたものである。内藤の指摘するように、「国家の外側」への排除は、国家による「中心」と「周縁」の空間的な分類をもとに達成されてきたのである (内藤 2010: 684)。1963 年にケニアがイギリスから独立を達成したあとも、北部地域は周縁的な地位を脱することなく、深刻な政治的迫害と経済的停滞を経験してきた (Anderson 2014; Lochery 2012; Whittaker 2012)。他方で国家体制内の政治

⁴⁶ 1959 年 8 月に開かれた北部州家畜市場化委員会の定期会議で、獣医担当官のマクドナルド (J. Macdonald) は、ラクダのバーター取引に反対する理由を次のように説明している。「全般的な条件として、ラクダは市場価値のない商品であり、唯一の例外が 95 シリングでフィールド屠畜場に売却することだということを、認めなければなりません。バーター交換によって、ラクダは 300 から 400 シリングという架空の価値 (fictitious value) がついています。サンプルではしばしば、600 シリングに相当する 3 頭の去勢オスと交換されています。」また、この会議で北部辺境県に隣接するリフトバレー州の長官は、「リフトバレーに市場のない家畜が増えるのを望んでいません」と意見を述べている (Record of the Second Meeting of the Northern Province Livestock Marketing Committee, August 29, 1959: AGR 1/55)。

⁴⁷ Northern Province Handing Over Report, 1953: KNA/PC/NFD 2/1/4; Dalleo, 1975: 177-178.

的・経済的な優位は、イギリス人の手からハイランド地方出身者を中心とする新たな支配層へと引き継がれた。

このように周縁的な地位にあった北ケニアで植民地期に統治の任に実際に当たっていたのが、地方行政官であった。ケニアのほかの地域とは異なり特別県（行政）法令が適用されていた北部境界県では、そこに居住する牧畜民を逮捕し、移動を制限するなどの強力な法的権限が地方行政官に与えられていた。地方行政官と牧畜民は、この点で非対称的な権力関係にあったと言える。とはいえ、地方行政官の日常的な実践が牧畜民と同様に北ケニアの生態的・経済的・政治的環境のなかで編まれており、またそれによって条件づけられていたことを想起するならば、上記とは異なる関係が見えてくる。降雨が少なく不安定で乾燥した北ケニアは、予算制約の問題もあって自動車を使った移動や輸送には限界があり、任地としても不遇な環境であった。つまり、北ケニアの環境において地方行政官は生態的にも制度的にも脆弱な立場にあったのであり、この点で牧畜民に対して何ら優位にあったわけではなかった。本論で検討してきたように、北ケニアの地方行政官が統治実践を遂行するために、ソマリやボラナをはじめとする牧畜民が生を依存してきたラクダまでも資源として利用していた背景には、この種の立場の脆弱性があったのだ。このように考えると、北ケニアにおける統治者と被統治者は法的な観点からは非対称的な立場にありながら、同時に、この地域の環境に各々の実践を条件づけられ、各々のしかたでラクダを資源として評価・利用していたという点で、複雑な関係にあった、とすることができるだろう。

最後に、残された課題を指摘したい。本論の第3節で、北ケニアの植民地当局がラクダの扱いに習熟した牧畜民を牧夫や警察隊として雇用し、あるいは民俗語彙をリスト化することによって、牧畜民社会の在来の知識を取り込んでいった、という点を指摘した。このことは、植民地当局が牧畜民を「神話」に棲まう者として異化・他者化する一方で、彼らの経験に根ざした知識を動員するという二面性を備えていたことを示唆している。在来知と近代科学、あるいは植民地の科学者とのあいだの複雑で動的な関係は、近年のアフリカ科学史研究でも注目されているテーマである（Beinart 2000; Bonneuil 2000; Brown 2011; Tilley 2011; van Beusekom 2000）。ラクダに関する在来の知識がどのようにして植民地体制内で動員されたのか、それは科学的な理解とどのように接合したのか、そしてその過程で統治者 - 被統治者の関係がどのように変化していったのか。以上の問いを深めることを、今後の課題としたい。

謝辞

本論執筆のための資料収集は、フィールドワーク・インターンシッププログラム（2012年度）と日本学術振興会の研究助成（2013・2014年度）によって可能になりました。また、本論の作成に当たっては、太田至先生、佐川徹先生、波佐間逸博先生、山越言先生、稲角暢氏、および2名の査読者の方に貴重な指摘をしていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

イギリス国立公文書館保管文書

CO 927/64/1

オクスフォード大学ボドレアン図書館保管文書

Mss. Afr. s. 1426

Mss. Afr. s. 2108

ケニア国立公文書館 (Kenya National Archives) 保管文書

AGR 1/55

BV/12 313

DC/ISO 1/5/1

DC/ISO 3/4/8

DC/ISO 3/20/2

PC/NGO 1/7/24

PC/NFD 1/11/1

PC/NFD 2/1/1

PC/NFD 2/1/4

PC/NFD 4/1/3

PC/NFD 5/5/9

PC/NFD 7/4

二次資料

Aldington, T.J. and Frank Wilson

1968 *The Marketing of Beef in Kenya*, Nairobi: Institute of Development Studies.

Allen, Charles

1979 *Tales from the Dark Continent*, London: Andre Deutsch.

Anderson, David

1984 "Depression, Dust Bowl, Demography and Drought: The Colonial State and Soil Conservation in East Africa during the 1930s," *African Affairs* 83-332: 321-343.

Anderson, David

1993 "Cow Power: Livestock and the Pastoralist in Africa," *African Affairs* 92-336: 121-133.

Anderson, David

2014 "Remembering Wagalla: State Violence in Northern Kenya, 1962-1991," *Journal of Eastern African Studies* 8-4: 658-676.

Anderson, David, Hannah Elliott, Hassan Hussein Kochore and Emma Lochery

2012 "Camel Herders, Middlewomen, and Urban Milk Bars: the Commodification of Camel Milk in Kenya," *Journal of Eastern African Studies* 6-3: 383-404.

Archer, Geoffrey

1963 *Personal and Historical Memoirs of an East African Administrator*, London:

Oliver & Boyd LTD.

アーノルド、デイヴィッド

1999 『環境と人間の歴史—自然、文化、ヨーロッパの世界的拡張』、飯島昇蔵・河島耕司訳、新評論。

Beinart, William

2000 “African History and Environmental History,” *African Affairs* 99-395: 269-302.

Bonneuil, Christophe

2000 “Development as experiment: Science and State Building in Late Colonial and Postcolonial Africa, 1930-1970,” *Osiris* 15: 258-281.

Brockington, Daniel and Katherine Homewood

1996 “Wildlife, Pastoralists and Science: Debates Concerning Mkomazi Game Reserve, Tanzania,” In Leach, Melissa and Robin Mearns (eds.), *The Lie of the Land: Challenging Received Wisdom on the African Environment*, pp.91-104, Portsmouth, N.H.: Heinemann.

Brown, Karen

2011 *Mad Dogs and Meerkats: A History of Resurgent Rabies in Southern Africa*, Athens: Ohio University Press.

Cassanelli, Lee

1982 *The Shaping of Somali Society: Reconstructing the History of a Pastoral People, 1600-1900*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Catley, Andy, Lind, Jeremy, and Ian Scoones

2013 “Development at the Margins: Pastoralism in the Horn of Africa,” In Catley, Andy, Lind, Jeremy, and Ian Scoones (eds.), *Pastoralism and Development in Africa: Dynamic Change at the Margins*, pp.1-26, London: Routledge.

Chenevix-Trench, Charles

1965 “Why a Greek: An East African Frontier in 1905,” *History Today* 15: 48-56.

Chenevix-Trench, Charles

1993 *Men Who Ruled Kenya*, London: Radcliffe Press.

Colony and Protectorate of Kenya (CPK)

1935 *Ordinances: Enacted during the Year 1934*, Nairobi: The Government Printer.

Colony and Protectorate of Kenya, Native Affairs Department (CPK, NAD)

1931 *Annual Report, 1931*, London: H.M. Stationery Office.

Dalleo, Peter

1975 *Trade and Pastoralism: Economic Factors in the History of the Somali of Northeastern Kenya, 1892-1948*, Ph.D Thesis, Syracuse University.

ダーントン、ロバート

2007 『猫の大虐殺』、海保眞生・鷺見洋一訳、岩波書店。

Evans-Pritchard, Edward

1940 *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of*

- a Nilotic People*, Oxford: Clarendon Press.
- Fullerton, Peter
2008/2009 “Afloat in the Desert : The Royal Wajir Yacht Club,” *Old Africa* 20: 5-11.
- Gauthier-Pilters, Hilde and Anne Innis Dagg
1981 *The Camel: Its Evolution, Ecology, Behavior, and Relationship to Man*, Chicago: University of Chicago Press.
- Gordon, Robert
2003 “Fido: Dog Tales of Colonialism in Namibia,” In Beinart, William and Joann McGregor (eds.), *Social History of African Environments*, pp.241-254, Oxford: James Currey.
- 平田 真太郎
2009 『ケニアにおける土地所有権の社会分析—法システムの機能と進化の観点から』、横浜国立大学提出博士論文。
- Hodge, Joseph
2007 *Triumph of the Expert: Agrarian Doctrines of Development and the Legacies of British Colonialism*, Athens: Ohio University Press.
- Huxley, Elspeth
1935 *White Man's Country: Lord Delamere and the Making of Kenya, volume I, 1870-1914*, London: Chatto and Windus.
- Huxley, Elspeth
1985 *Out in the Midday Sun: My Kenya*, London: Chatto and Windus.
- 伊東 剛史
2008 「「幸福な家族」の肖像—19世紀ロンドンの「動物史」」、『史学』77巻2/3号: 329-359.
- Jacobs, Nancy
2001. “The Great Bophuthatswana Donkey Massacre: Discourse on the Ass and Politics of Class and Grass,” *American Historical Review* 108: 485-507.
- Kirk-Greene, Anthony
1989 “Badge of Office?: Sport and His Excellency in the British Empire,” *The International Journal of the History of Sport* 6-2: 218-241.
- Kirk-Greene, Anthony
2000 *Britain's Imperial Administrators, 1858-1966*, Houndmills: Macmillan Press.
- Kirk-Greene, Anthony
2006 *Symbol of Authority: The British District Officer in Africa*, London: I.B. Tauris.
- Knowles, Joan and D.P. Collett
1989 “Nature as Myth, Symbol and Action: Notes towards a Historical Understanding of Development and Conservation in Kenyan Maasailand,” *Africa* 59-4: 433-460.
- Kratz, Corinne and Robert Gordon
2002 “Persistent Popular Images of Pastoralists,” *Visual Anthropology* 15-3/4: 247-265.

楠 和樹

- 2014 「牛と土—植民地統治期ケニアにおける土壌侵食論と「原住民」行政」、『アジア・アフリカ地域研究』13巻2号: 267-85.

Leach, Melissa and Robin Mearns

- 1996 “Environmental Change and Policy: Challenging Received Wisdom in Africa,” In Leach, Melissa and Robin Mearns (eds.), *The Lie of the Land: Challenging Received Wisdom on the African Environment*, pp.1-33, Portsmouth, N.H.: Heinemann.

Lewis, Ioan

- 1961 *A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa*, Oxford: James Currey.

Lochery, Emma

- 2012 “Rendering Difference Visible: The Kenyan State and its Somali citizens,” *African Affairs* 111-445: 615-639.

Maciel, Mervyn

- 1985 *Bwana Karani*, Braunton: Merlin Books.

Mahmoud, Hussein Abdullahi

- 2013 “Pastoralists' Innovative Responses to New Camel Export Market Opportunities on the Kenya Ethiopia Borderlands,” In Andy, Catley, Jeremy Lind and Ian Scoones (ed.), *Pastoralism and Development in Africa: Dynamic Change at the Margins*, pp.98-107, London: Routledge.

水野 一晴

- 2014 「自然環境—乾燥地から高山まで多様な自然と変わりつつある自然」、松田素二・津田みわ編『ケニアを知るための55章』、pp. 24-28、明石書店。

内藤 直樹

- 2010 「東アフリカ牧畜社会における政治的民主化と民族間関係の動態—北ケニア牧畜民アリアルが経験した地方分権化と国会議員選挙の事例から」、『国立民族学博物館研究報告』34巻4号: 681-721.

Nori, Michele, Matthew Kenyanjui, Mohammed Ahmed Yusuf and Fadhumo Hussein Mohammed

- 2006 “Milking Drylands: The Marketing of Camel Milk in North East Somalia,” *Nomadic Peoples* 10-1: 9-28.

Prior, Christopher

- 2013 *Exporting Empire: Africa, Colonial Officials and the Construction of the British Imperial State, c. 1900-39*, Manchester: Manchester University Press.

Raikes, Philip

- 1981 *Livestock Development and Policy in East Africa*, Uppsala: Scandinavian Institute of African Studies.

リトヴォ、ハリエツト

- 2001 『階級としての動物—ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』、三好みゆき訳、国文社。
- Schlee, Günther
1989 *Identities on the Move: Clanship and Pastoralism in Northern Kenya*, Manchester: Manchester University Press.
- Schlee, Günther
2010 *Territorialising Ethnicity: The Political Ecology of Pastoralism in Northern Kenya and Southern Ethiopia*, Working Paper 121, Halle: Max Planck Institute for Social Anthropology.
- Scoones, Ian
1994 “New Directions in Pastoral Development in Africa,” In I. Scoones (ed.), *Living with Uncertainty: New Directions in Pastoral Development in Africa*, pp.1-36, London: Intermediate Technology Publications.
- Shadle, Brett
2012 “Cruelty and Empathy, Animals and Race, in Colonial Kenya,” *Journal of Social History* 45-4: 1097-1116.
- Sobania, Neal
1988 “Pastoralist Migration and Colonial Policy: A Case Study from Northern Kenya,” In Johnson, Douglas and David Anderson (eds.), *The Ecology of Survival: Case Studies from Northeast African History*, pp.219-39, London: Lester Crook Academic Publishing.
- Spencer, Paul
1965 *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*, London: Routledge.
- Sperling, Louise
1987 “The Adoption of Camels by Samburu Cattle Herders,” *Nomadic Peoples* 23: 1-17.
- Stoler, Ann Laura and Frederick Cooper
1997 “Between Metropole and Colony: Rethinking a Research Agenda,” In Stoler, Ann Laura and Frederick Cooper (eds.), *Tensions of Empire: Colonial Culture in a Bourgeois World*, pp.1-56, London: University of California Press.
- 孫 暁剛
2012 『遊牧と定住の人類学—ケニア・レンディーレ社会の持続と変容』、昭和堂。
2014 「牧畜活動の生態」、日本アフリカ学会編『アフリカ学事典』、pp. 528-531、昭和堂。
- Swift, Jeremy
1996 “Desertification: Narratives, Winners and Losers,” In Leach, Melissa and Robin Mearns (eds.), *The Lie of the Land: Challenging Received Wisdom on the African Environment*, pp.73-90, Portsmouth, N.H.: Heinemann.
- Tilley, Helen

2011 *Africa as a Living Laboratory: Empire, Development, and the Problem of Scientific Knowledge, 1870-1950*, Chicago: University of Chicago Press.

van Beusekom, Monica

2000 "Disjunctures in Theory and Practice: Making Sense of Change in Agricultural Development at the Office du Niger, 1920-60," *The Journal of African History* 41-1: 79-99.

Weitzberg, Keren

2013 "Producing History from Elisions, Fragments, and Silences: Public Testimony, the Asiatic Poll-Tax Campaign, and the Isaaq Somali Population of Kenya," *Northeast African Studies* 13-2: 177-206.

Whittaker, Hannah

2015 *Insurgency and Counterinsurgency in Kenya: A Social History of the Shifta Conflict, c. 1963-1968*, Leiden: Brill.

One-humped Camel and the Colonial Rule on the Desert : An Inquiry into the Colonial Rule and Resource Utilization in Northern Kenya in the First Half of the 20th Century

Kazuki Kusunoki

In northern Kenya, many pastoral nomads are living off such livestock as camel, cattle, goats, sheep and donkeys. Among them, camels are important assets, especially for Eastern Cushitic speakers such as the Somali and Rendille. For them, camels are precious livestock not only economically, but also in terms of social, political, and religious significances. Additionally in the past, camels were important also for the British colonial officers and administrators who came here in the early twentieth century. This article explores colonial relationship between the local officers and the pastoral nomads in northern Kenya in the first half of the twentieth century by examining colonial ways of evaluation and utilization of camels.

In northern Kenya under the colonial rule, considerable restrictions were imposed on the indigenous economic activities, which depended heavily on camels that adapted well to the arid environment. In contrast, camels were utilized not only for transport and patrolling purposes, but for underpinning the collective identities of local colonial officers. On the other hand, although camels were good producers of meat and milk, these merits were not utilized for the colonial purposes. They had to utilize camels selectively on their purposes, for the local officers were in a fragile position ecologically and institutionally in northern Kenya. This article demonstrates that the colonial relationship between the rulers and the ruled can be characterized as complicated, in the sense that both were asymmetrical in a legal aspect on the one hand, and both were conditioned for their practices by the environment on the other.

Keywords

Colonial Rule, Resource, Mythologization of Pastoralism, Camel, Kenya